# 第四講　総合問題　60分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

与えられた困難を人間の力で解決しようとして営まれるテクノロジーには、問題を自ら作り出し、それをまた新たな技術の開発によって解決しようとするという形で自己展開していく傾向が、本質的に宿っているように私には思われる。科学技術によって産み落とされた環境破壊が、それを取り戻すために、新たな技術を要請するといった事例は、おそらく枚挙にいとまがないし、感染防止のためのワクチンに対してウィルスが[a]タイセイを備えるようになり、新たな開発を強いられるといったことは、毎冬のように耳にする話である。東日本大震災の直後稼働を停止した浜岡原発に対して、中部電力が海抜二二メートルの防波堤を築くことによって、「安全審査」を受けようとしているというニュースに接したときも、同じ想いがリフレインするとともに、こうした展開に果たして終わりがあるのだろうかという気がした。技術開発の展開が無限に続くとは、たしかにいい切れない。次のステージに何が起こるのか、当の専門家自身が予測不可能なのだから、

先のことは誰にも見えないというべきだろう。けれども ア 科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無を言わせず人間をどこまでも牽引(けんいん)していく不気味なところがある。いったいそれはなんであり、世界と人間のどういった関係に由来するのだろうか。

　医療技術の発展は、例えば不妊という状態を、技術的克服の課題とみなし、人工授精という技術を開発してきた。その一つ体外受精の場合、受精卵着床の確率を上げるために、排卵誘発剤を用い複数の卵子を採取して受精させた上で子宮内に戻す、といったことが行われてきたが、これによって多胚妊娠の可能性も高くなった。多胚妊娠は、母体へのフィジカルな影響や出産後の経済的なことなど、さまざまな負担を患者に強いるため、現在は子宮内に戻す受精卵の数を制限するようになっている。だが、この制限によっても多胚の「リスク」は、自然妊娠の二倍と、なお完全にコントロールできたわけではないし、複数の受精卵からの選択、また選択されなかった「もの」の「処理」などの問題は、依然として残る。

　いずれにせよ、こうした問題に関わる是非の判断は、技術そのものによって解決できる次元には属していない。体外受精に比してより身近で起こっている延命措置の問題。たとえば胃瘻(いろう)などは、マスコミもとりあげ関心を惹くようになったが、もはや自ら食事を摂れなくなった老人に対して、胃

に穴をあけるまでしなくても、鼻からチューブを通して直接栄養を胃に流し込むことは、かなり普通に行われている。このような措置が、ほんのその一部でしかない延命に関する技術の進展は、以前なら死んでいたはずの人間の生命を[b]キュウサイし、多数の療養型医療施設を生み出すに到っている。

しかしながら老齢の人間の生命をできるだけ長く引き伸ばすということは、可能性としては現代の医療技術から出てくるが、現実化すべきかどうかとなると、その判断は別なカテゴリーに属す。「できる」ということが、そのまま「すべき」にならないのは、核爆弾の技術を持つことが、その使用を是認することにならないのと一般である。テクネー（τέχνη）である技術は、ドイツ語（Kunst）の語源が示す通り、「できること（können）」の世界に属するものであって「すべきこと（sollen）」とは区別されねばならない。

テクノロジーは、本質的に「一定の条件が与えられた時に、それに応じた結果が生ずる」という知識の集合体である。すなわち、「どうすればできるのか」についての知識、ハウ・トゥーの知識だといってよい。それは、結果として出てくるものが望ましいかどうかに関する知識、それを統御する目的に関する知識ではないし、またそれとは無縁でなければならない。

その限りのところでは、テクノロジーは、ニュートラルな道具だと、いえなくもない。ところが、こうして「すべきこと」から離れているところに、それがィ単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由もある。

テクノロジーは、実行の可能性を示すところまで人間を導くだけで、そこに行為者としての人間を放擲するのであり、放擲された人間は、かつてはなしえなかったがゆえに、問われることもなかった問題に、しかも決断せざるをえない行為者として直面する。

妊娠の血液検査によって胎児の染色体異常を発見する技術には、そのまま妊娠を続けるべきか、中絶すべきかという判断の是非を決めることはできないが、その技術と出会い行使した妊婦は、いずれかを選び取らざるをえない。いわゆる「新型出生前診断」が二〇一三年四月に導入されて以来一年の間に、追加の羊水検査で異常が認められた妊婦の九七％が中絶を選んだという。

療養型医療施設における胃瘻や経管栄養が前提としている生命の可能な限りの延長は、否定しがたいものだし、それを入所条件として掲げる施設があることも、私自身は経験して知っている。だが、飢えて死んでいく子供達が世界に数え切れないほど存在している現実を前にするならば、自ら

食事をとることができなくなった老人の生命を、公的資金の投入まで行って維持していくことが、社会的正義にかなうかどうか、少なくとも私自身は躊躇（ちゅうちょ）なく判断することができない。

　ここで判断の是非を問題にしようというのでは、もちろんないし、選択的妊娠中絶の問題一つとってみても、最終的な決定基準があるなどとは思えない。むしろ肯定・否定を問わず、いかなる論理をもってきても、それを基礎づけるものが欠けていること、そういう意味でゥ実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだと、私は考えている。

　たとえば現世代の化石燃料の消費を将来世代への責任（レスポンシビリティー）によって制限しようとする論理は、物語としては理解できるが、現在存在しないものに対する責任など、応答（レスポンス）の相手がいないという点で、想像力の産物でしかないといわざるをえない。同じ想像力を別方向に向ければ、そもそも人類の存続などといったことが、この生物種に宿る尊大な欲望でしかなく、人類が、他の生物種から天然痘や梅毒のように根絶を祈願されたとしても、かかる人類殲滅（せんめつ）の野望は、人間がこれら己（おの）れの敵に対してもっている憎悪と、本質的には寸分の違いもないといいうるだろう。その他倫理的基準なるものを支えているとされる概念、たとえば「個人の意思」や「社会的コンセンサス」などが、その美名にもかかわらず、虚構性をもっていること

は、少しく考えてみれば明らかである。主体となる「個人」など、確固としたものであるはずがなく、その判断が、時と場合によって、いかに動揺し変化するかは、誰しもが経験することであり、そもそも「個人の意思」を書面で残して「意思表明」するということ自体、かかる「意思」なるものの可変性をまざまざと表している。また「コンセンサス」づくりの「公聴会」なるものが権力関係の追認でしかないことは、私たち自身、いやというほど繰り返し経験していることではなかろうか。

　だが、行為を導くものの虚構性の指摘が、それに従っている人間の愚かさの摘発に留まるならば、それはほとんど意味もないことだろう。虚構とは、むしろ人間の行為、いや生全体に不可避的に関わるものである。人間は、虚構とともに生きる、あるいは虚構を紡ぎ出すことによって己を支えているといってもよい。問題は、テクノロジーの発展において、虚構のあり方が大きく変わったところにある。テクノロジーは、それまでできなかったことを可能にすることによって、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかされなかった虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質を[c]ヨギなくさせた。それは、不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態、「自然」に任すことができた状況を人為の範囲に落とし込み、これに呼応する新たな虚構の産出を

強いるようになったのである。そういう意味でェテクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう。

（伊藤徹『芸術家たちの精神史』一部省略）

〔注〕○排卵誘発剤――卵巣からの排卵を促進する薬。
○多胚妊娠――二人以上の子供を同時に妊娠すること。
○胃瘻――腹壁を切開して胃内に管を通し、食物や水、薬などを流入させる処置。

㈠　「科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無を言わせず人間をどこまでも牽引していく不気味なところがある」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

㈡　「単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

㈢　「実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだ」（傍線部ウ）とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。

㈣　「テクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう」（傍線部エ）とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

㈤　傍線部ａ・ｂ・ｃのカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a　タイセイ　　b　キュウサイ　　c　ヨギ

| (一) | (二) | (三) |
|---|---|---|
| | | |

㈣

㈤

a

b

c

# 第四講　総合問題　解答

| (一) | |
|---|---|
| 科学技術は所与の困難を人為的に解決するものだが、それ自体が人間には予測不可能な問題を生み、新たな技術による解決を求めるということ。 | |

| (二) | |
|---|---|
| テクノロジーは実行の理非や目的ではなく実行の可能を示すだけのものなので、人間に新たな問題に対する決断を迫るものだということ。 | |

| (三) | |
|---|---|
| 個や集団の実践的判断を基礎づける倫理的基準は、時と場合や権力という条件によって可変的に作られる虚構性を持っているから。 | |

《(三)別解》
実践的判断を基礎づける倫理的基準は、絶対的な真理性ではなく、様々な諸条件によって作られる相対的な虚構性を持っているから。

㈣

予測不可能な問題を生み出し理非や目的を示すことなく人為的解決を迫るテクノロジーは、人間と不可避的に関わる虚構を、従来人間が自らを律する際に判断することなく従ってきた神話から、様々な条件によって作られた倫理的な基準へと変えるということ。

㈤

a 耐性

b 救済

c 余儀